文化遺産国際協力コンソーシアム　平成 22 年度 協力相手国調査

アルメニア共和国調査報告書

文化遺産国際協力コンソーシアム　平成 22 年度協力相手国調査

アルメニア共和国調査報告書

序文

文化遺産国際協力コンソーシアムでは、我が国の文化遺産保護の分野における国際協力を推進するためにさまざまな情報収集を行っています。平成22年度は、協力相手国の状況調査として、アルメニア共和国（以下アルメニア）での聞き取り調査を実施しました。

アルメニアの位置する南コーカサスは、アジアの西端に位置し、東西文化が交錯する場として、多彩な文化が織り成されています。一方でこの地は、東西大国がせめぎ合う緩衝地帯として、非常に複雑な歴史を持っています。アルメニアは、世界で最初にキリスト教を国教に定めた国としても知られ、大変古い歴史を持った国でもあります。

こうした歴史あるアルメニアに対して、我が国は様々な形で支援を行っています。例えば、ここ最近の文化関係に限っても、草の根文化無償資金協力「マテナダラン古文書館に対する古文書保存機材フォローアップ計画」（平成13年度）、一般文化無償資金協力「エレバン国立音楽院楽器整備計画」（平成20年度）、同「アルメニア国立美術館美術品修復機材整備計画」（平成21年度）などが実施され、資金援助・機器供与などを通して重点的に日本からの支援や協力が行われてきました。

一方、アルメニアは旧ソビエト連邦の国家であるという点も重要な側面です。独立から20年が経ち、益々旧ソ連邦の国々との関係が我が国にとっても重要になりつつある中で、アルメニアにおける文化財保護分野の状況を把握することは、コーカサス地域における今後の日本の支援や協力を考える上で重要であると思われます。本報告書が今後の我が国によるアルメニアへの国際協力において、幅広い分野の方にご活用いただければ幸いです。

最後に、この調査の実施にあたりご尽力賜りました外務省、文化庁等の日本国内の関係者の皆様、並びにアルメニア共和国文化省をはじめとするアルメニアの関係諸機関に深く感謝申し上げます。

平成24年3月

文化遺産国際協力コンソーシアム

例言

1．本報告書は、文化遺産国際協力コンソーシアム協力相手国調査としてアルメニアでの文化遺産保護状況に関して行った現地調査を報告するものである。調査は聞き取りと現地調査を中心に行い、報告書は原則としてこの調査に基づくものであるが、一部は翌年度に調査メンバーが追加で収集した情報が含まれている。

2．本報告書は以下の担当で執筆した

本文執筆　第１章　有村誠、邊牟木尚美、原本知実
　　第２章　有村誠（考古学）、邊牟木尚美（保存修復）
　　第３章　有村誠

編集　文化遺産国際協力コンソーシアム　原本知実

目次

1. 調査概要 6
1－1. 調査の目的と調査メンバー 6
1－2. アルメニアを調査対象とした理由 6
1－3. 調査方法 6
1－4. 行動記録 7
1－5. 訪問した機関と面談者の概要 8
1-5-1. 文化省 8
1-5-2. アルメニア保存修復センター 8
1-5-3. アルメニア歴史博物館 8
1-5-4. 国立美術館 8
1-5-5. マテナダラン 8
1-5-6. 歴史文化遺産科学研究センター 10
1-5-7. 考古民族研究所 10
1-5-8. JICA 連絡事務所 10
1-5-9. アートエキスポ 10
1-5-10. エレブニ遺跡および博物館 10
1-5-11. エチミアジン大聖堂および付属博物館 12

2. アルメニア共和国における文化財保護 14
2－1. 概要 14
2－2. アルメニア共和国における文化財の保存修復の状況 14
2-2-1. アルメニア歴史博物館 16
2-2-2. 国立美術館 20
2-2-3. 歴史文化財科学研究センター 22
2-2-4. マテナダラン国立古文書館 26
2-2-5. アルメニアの保存修復分野に対する考察 28
2－3. アルメニア共和国における考古学調査の状況 30
2-3-1. 調査主体 30
2-3-2. 調査許可の申請と主体者の義務 30
2-3-3. 遺跡の登録 30
2-3-4. 考古学における人材育成 30
2-3-5. 問題点 31

3. 日本による協力可能性のある分野 32
3－1. シンポジウムやワークショップの開催 32
3－2. 大学との連携協力 32
3－3. 機材供与による支援 33

4. おわりに 34

5. 現地入手資料一覧 35

1. 調査概要

1－1. 調査の目的と調査メンバー

調査の目的

文化遺産国際協力コンソーシアム（以下コンソーシアム）では、我が国による文化遺産国際協力の推進を目的として協力相手国調査を行っている。協力相手国調査には自然災害などで被災した文化遺産の救済への協力に向けて行う緊急調査と、一般的な文化遺産の被害状況を調べる通常調査がある。今回の調査は平成22年度の通常調査の一つとして、アルメニア共和国（以下アルメニア）での文化遺産保護状況と国際協力の現状を把握し、日本による協力の可能性を調べるために実施した。

調査メンバー

有村　誠　（東京文化財研究所　文化遺産国際協力センター　特別研究員）
邊牟木尚美（東京文化財研究所　文化遺産国際協力センター　特別研究員）
原本　知実（文化遺産国際協力コンソーシアム　調査員）

1－2. アルメニアを調査対象とした理由

アルメニアは旧ソビエト連邦から独立以後、それまで研究をリードしてきた研究者の撤退に伴い、文化遺産の保存修復や考古学などの調査研究の幅広い面で独自の研究体制の確立や人材育成で問題を抱えている。そのため、アルメニア共和国文化省より、文化遺産分野で日本に協力してほしいとの要請がコンソーシアムに寄せられた。これまでアルメニアに対しては日本から文化遺産の分野では、ODAにより機材供与や建造物調査などで協力が行われてきたが、文化省が協力を希望している保存修復や考古学の分野での協力はほとんど行われておらず、情報が少ない状況にあった。そのため、今後日本の専門家や関係機関が協力できる分野を正確に把握するために、コンソーシアム企画分科会での承認を経て、調査団を派遣することとなった。

1－3. 調査方法

今回の調査では、アルメニア側の希望により、主に博物館や美術館での保存修復や考古学の分野での協力要請を調べるために、文化省を中心として保存修復や考古学調査に関係する組織・個人との面談と、展示や修復施設などの視察を中心に行った。なお、事前の会議のアレンジには、有村が旧知であった国立美術館のアニ・アヴァギャン（Ms. Ani AVAGYAN、Head of Education & PR Department, National Gallery of Armenia）が協力した。

１－４. 行動記録

日付	場所	内容	面談相手または調査対象遺跡
２月８日（火）	アルメニア歴史博物館	視察	博物館展示品と博物館設備
	国立美術館	面談	Mr. Ashot PILIPOSYAN（保存修復センター副所長） Ms. Marine HAROYAN（ICOM 国内委員会委員長） Ms. Hripsime PIKICHYAN （博物館職員・支援者 NGO 協会会長） Ms. Ani AVAGYAN -（ICOM 国内委員会理事長） Ms. Ruzan KHOJIKYAN -（JICA プログラムコーディネーター）
２月９日（水）	エレブニ	視察	エレブニ遺跡と付属博物館
	文化省	面談	Ms. Arev SAMUELYAN （文化省副大臣） Ms. Sussanna KHACHATRYAN（文化省外務部副部長） Mr. Ashot PILIPOSYAN（保存修復センター副所長） Ms. Ani AVAGYAN （ICOM 国内委員会理事長） Ms. Ruzan KHOJIKYAN -（JICA プログラムコーディネーター）
	歴史文化遺産科学研究センター	視察及び面談	Mr. Kozyun GHAFADARYAN (副長) Mr. Hovhnnes SANANNYAN（副長） Mr. Galnik MOMJYAN（文化省国際協力担当者） Ms. Ruzan KHOJIKYAN -（JICA プログラムコーディネーター）
	JICA 連絡事務所	面談	Ms. Ruzan KHOJIKYAN -（JICA プログラムコーディネーター）
２月１０日（木）	国立美術館	視察及び面談	Mr. Pharaon Mirzoyan (館長) 面談後に館内展示と保存修復工房見学
	アルメニア歴史博物館	面談	Ms. Yelena ATOYANTS (修復部長) Ms. Armine ZOHRABYAN (考古学者)
	マテナダラン	視察及び面談	Ms. Gayane ELIAZYAN（保存修復部長） 修復工房を見学しながらの面談ののち展示の見学
２月１１日（金）	ドゥビン遺跡	視察	地震で崩れた遺跡の視察
	エチミアジン	視察	教会と付属博物館見学
	アートエキスポ会場	視察	アートエキスポ

１－５. 訪問した機関と面談者の概要

1-5-1. 文化省（Ministry of Culture, Armenia）

アルメニアにおける有形・無形の文化遺産の保護を管轄している省庁。アルメニア歴史博物館、歴史文化遺産科学研究センターなどが省管轄の機関としてある。副大臣アレヴ・サムエルヤン氏（Ms. Arev Samuelyan: Vice Minister of Culture of Republic of Armenia）と面会、アルメニアにおける文化財保護の現状や今後の日本に期待する協力分野などについて話を聞いた（写真 01）。

1-5-2. アルメニア保存修復センター（National Conservation Center of Armenia）

2010 年 5 月に設立した文化省管轄の組織。現在のところ不動産の研究や保存修復を行っている。イタリア文化省と共同で、教会の修復などを行っている。将来的には、動産の保存修復部門も設置し、アルメニアにおける文化財の保存修復の拠点になるという目的があるようである。エレバン中心部の南の入口、ラズダン川のほとりにセンターは設置された（未訪問）。副所長であるアショット・ピリポスヤン（Mr. Ashot PILIPOSYAN）に話を聞いた（写真 02）。

1-5-3. アルメニア歴史博物館（History Museum of Armenia）

市街地の中心、共和国広場に面する（写真 03）。その歴史は古く、前身となった組織は 1919 年に設立された民族・人類学博物館・図書館である。2003 年より現在の歴史博物館という組織になった。アルメニア国内で発見・収集された貴重な考古・民族資料を多数所蔵する。常設展示に加え、さまざまな企画展示を積極的に行っている。また、先史時代、青銅器文化、ウラルトゥ、中世などの常設展が 2009 ～ 2011 年にかけて次々にリニューアルされ公開された。研究機関としては、考古学部、古銭学部、民族学部、現代史部、保存修復部の 5 つの部局からなる。館長はアネルカ・グリゴルヤン（Ms. Anelka Grigoryan）。博物館修復部長のエレナ・アトヤンツ（Ms. Yelena Atoyants）と考古学者のアルミネ・ゾフラブヤン（Armine Zohrabyan）と面会した（写真 04）。詳細については、次章を参考。

1-5-4. 国立美術館（National Gallery of Armenia）

歴史博物館に隣接する（写真 03 中央の高層建物部）。主に、アルメニア、ロシア、ヨーロッパの絵画や彫刻などの美術品を収蔵する。小規模ながら中国などの東洋美術も展示されている。修復工房も備えており、美術品の修復処置を独自に行っている。また、国際協力機構（以下 JICA）の保存修復に関連する機材供与が 2011 年に行われた（平成 21 年度・一般文化無償資金協力「アルメニア国立美術館美術品修復機材整備計画」）。館長ファラオン・ミルゾヤン（Mr. Pharaon Mirzoyan）と面会し、話を聞いた。詳細は次章を参考。

1-5-5. マテナダラン（Matenadaran）

メスロプ・マシュトツ古文書研究所（Mesrop Mashtots Institute of Ancient Manuscripts）または通称マテナダラン古文書館は、約 30 万点以上の貴重なアルメニア語の古文書（聖書、文学、科学、医学関連）を所蔵する世界有数の古文書館である（写真 05）。マテナダランの主な役割には、古文書の保存修復、記録・保管、情報発信などがある。保存修復部長ガヤネ・アリアツヤン（Ms. Gayane Eliazyan）から話を聞いた（写真 06）。詳細は、次章を参考。

01. 文化省における文化副大臣らとの面談

02. 保存補修センター副所長らとの面談

03. アルメニア歴史博物館・美術館

04. アルメニア歴史博物館での面談

05. マテナダラン古文書館

06. マテナダラン保存修復部長の説明

1-5-6. 歴史文化遺産科学研究センター（Scientific Research Center for the Historical and Cultural Heritage）

考古学、保存修復、建築の専門家など約 50 人が所属する文化財の調査・研究・保護を扱う機関（写真 07）。文化省管轄にある。現所長は、ハコブ・シモニャン（Mr. Hakob Simonian）。考古遺跡の発掘や歴史建造物の保存修復・管理を行っている。ルチャシェン（Lchashen：青銅器時代、中世）やシェンガビ（Shengavit：銅石器時代後半、青銅器時代）といった考古遺跡の発掘を行っている。また、不動文化遺産の登録を担当している機関でもある。登録に際しては、文化財パスポートと呼ばれる記録台帳に情報や写真が記録され保管される。詳細については、次章を参考。

1-5-7. 考古民族研究所（Institute of Archaeology and Ethnography）

1959 年創立の研究所で、前身は科学アカデミーの歴史学研究所。アルメニア科学アカデミー所属の機関。考古学、民族学、人類学などの調査・研究を行う。エレバン市の外環に位置する。国内の考古学遺跡の学術調査・研究、緊急調査を、単独または外国隊との共同によって数多く実施する。およそ 100 人の研究員が所属し、6 つの部局がある（先史考古学部、古代考古学部、中世考古学部、緊急考古学部、考古自然科学部、保存修復部）。現所長はパヴェル・アヴェティスヤン（Pavel Avetisyan）（写真 08）。詳細については、次章を参考。

1-5-8. JICA 連絡事務所

2011 年現在、事務所ではなく連絡事務所。スタッフは現在ルザン・ホジキヤン（Ms. Ruzan Khojikyan）一人。日本で博士号をとり、10 年間滞在していたため、母国語のアルメニア語以外に日本語が堪能。他にロシア語、英語が話せる。アルメニアは省庁の反応が大変早く、情報提供にも快く応じてくれる。現在、日本の ODA で行っているものは、ガス火力発電所、変電所、免震のプロジェクトがある（前記 2 つは完了。現在は免震のみ。）

免震のプロジェクトを行っているのが、東文研とも協力実績のある OYO インターナショナル株式会社であった。その後、即、OYO インターナショナル株式会社の方からもプロジェクトのお話を聞くことができた（写真 09 ～ 10）。面会者は、JICA の業務調整員ルザン・ホジキヤン。

1-5-9. アートエキスポ

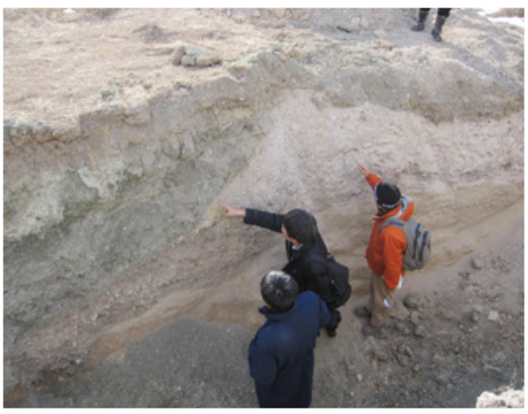
アートエキスポ見学。文化省傘下の博物館などが今年の成果を個々のブースを出展して発表する機会（写真 11 ～ 14）。歴史文化遺産科学研究センター内の保存修復工房、不動産調査を行ったアショット氏、登録を行っているセンター副長らと再会し、説明をうけることができた。また、考古民族研究所の関係者ともそこで会うことができた。

1-5-10. エレブニ遺跡および博物館

エレバン市郊外にあるウラルトゥの城砦都市跡（写真 15）。遺跡は大規模に復元され、史跡整備されている。麓に遺跡出土の遺物の展示を中心とした博物館が設置されている（写真 16）。博物館には小規模ながら、保存修復室もあり、土器の復元等が行われていた。

07. 歴史文化遺産科学研究センターでの面談

08. 考古・民族学研究所所長との面談


09. JICA 事業による地滑り層の確認

10. JICA 事業が行われているエレヴァン南部の風景とアララト山

11. アートエキスポの様子

12. アートエキスポ、歴史文化遺産科学研究センターのブース

13. アートエキスポ、歴史文化遺産科学研究センターのブース

14. アートエキスポでのアルメニア保存修復センターアショット・ピリポスヤンによる展示の説明

1-5-11. エチミアジン大聖堂および付属博物館

エチミアジンは、エレヴァンの西方約 20km にある宗教都市で、大聖堂をはじめいくつかの教会があり、アルメニア正教会の中心地である。この地の歴史は古く、２世紀にはヴァガルシャプトと呼ばれる首都がおかれていた。その後、キリスト教が普及していく過程で、４世紀にはエチミアジン大聖堂のある場所に教会が建てられたという。現在のエチミアジン大聖堂は、何回かの改修をうけており、特に 17 世紀の大改修によって現在のような姿になったとされる（写真 17 ～ 18）。大聖堂、教会群などが一括して 2000 年にユネスコの世界遺産に指定された。

エチミアジン大聖堂内部には、教会が所蔵する宝物が展示されている付属博物館がある。アルメニア正教にまつわる聖遺物、祭具、写本などを見ることができる。

15. エレブニ遺跡

16. エレブニ博物館

17. エチミアジン大聖堂

18. エチミアジン大聖堂

２. アルメニア共和国における文化財保護

２－１. 概要

アルメニアにおける文化財保護を担当する省庁としては、文化省、教育科学省がある。文化省が動産・不動産の登録・保護・利活用を、教育科学省傘下の科学アカデミーが学術研究を担当する傾向がある。文化省管轄の機関としては、アルメニア歴史博物館、歴史文化遺産科学研究センターなどがあり、教育科学省管轄では科学アカデミー考古民族研究所、マテナダランなどがある。これら諸博物館・研究機関は、そのほとんどがソ連邦時代に成立した組織をベースにしており、今日、組織ごとに役割分担が行われているわけではなく、組織間で同じような事業や研究を行っている現状がある。このような状況から、現在、文化省は、文化財保護分野の集約化を進める目的で、研究機関の統廃合を進めようとしている。その表れとして、文化財の保存修復を担うセンターとして、文化省管轄のアルメニア保存修復センター（National Conservation Center of Armenia）という新たな組織が最近設立された。

文化財保護分野でアルメニアを積極的に支援している国として、イタリアとフランスがある。イタリアは、アルメニアとの間で 2011 年 4 月 6 日に文化財保護に関する 2 国間協力の合意書を締結した（http://www.armtown.com/news/en/azg/20110408/2011040801）。調印は、ハスミック・ポゴスヤン（Hasmik Poghosyan）文化大臣とブルーノ・スカピニ（Bruno Scapini）在アルメニアイタリア大使との間で交わされた。この合意書は 2 年間の有効期間をもち、イタリア側の担当機関はミラノ・ポリテクニックである。総額 127 万 4 千ユーロのプロジェクトである。この協力事業では、動産・不動産の保存修復にかかわる人材の育成を目的とした研修が行われ、またアルメニア美術館に美術品保存修復のための修復室、アルメニア歴史博物館とエレブニ歴史・考古学博物館に考古遺物（金属、木製品、土器など）の保存修復室を設ける計画があるという。

フランス国立科学研究センター（CNRS）は、1998 年よりアルメニア考古民族研究所と共同で、考古学調査を実施してきた。新たに 2010 年には CNRS とアルメニア考古民族研究所との間で、「アルメニアにおける人間と環境の歴史」についての研究協力に関する覚書が締結された（通称 LIA“HEMMA” プロジェクト：Projet de Laboratoire International Associé (LIA) franco-arménien, HEMMA « Hommes et environnements en milieu montagnard, le cas de l’Arménie »）。研究代表者は、フランス側がリヨン・オリエント研究所クリスティン・シャテネ（Ms. Christine Chataigner）、アルメニア側がアルメニア考古民族研究所パヴェル・アヴェスティヤン（Mr. Pavel Avestiyan）となっている。このプロジェクトには、CNRS のオリエント研究所やモンペリエ大学などフランスの研究機関をはじめ、アルメニア側も考古民族研究所以外に地質学研究所などが参加するなど、考古学関連のさまざまな研究者が参加する学際プロジェクトとなっている。対象とする時代も先史時代から前 1 千年紀のウラルトゥ時代までと幅広く、約 1 万年の長きにわたる人と環境の相互作用について研究するプロジェクトが始まっている。

２－２. アルメニア共和国における文化財の保存修復の状況

今回の調査では、アルメニア共和国の文化財関係機関を管理する管理者を主な対象者として、インタビューを行った。更に、保存修復施設を持つ機関でかつ保存修復施設への立入を許可した機関においては、

歴史文化財科学研究センター保存修復ラボ　作業台の様子

歴史文化財科学研究センター保存修復ラボ　調査の様子

保存修復施設の視察および保存修復現場で働く現場の専門家に対してインタビューを行った。

2-2-1. アルメニア歴史博物館 (History Museum of Armenia)

面会者：

- 館長アネルカ・グリゴルヤン（Ms. Anelka Grigoryan）
- 考古学者アルミネ・ゾフラブヤン（Ms. Armine Zohrabyan）
- 保存修復室長イェレナ・アトヤンツ（Ms. Yerena Atoyants）

基礎情報：

- 博物館の収蔵品は、全てアルメニア歴史博物館のコレクションである。
- 保存修復分野の運営資金は、全てアルメニア政府の資金で賄われており、外部スポンサーからの資金提供は受けていない。
- 博物館には展示デザイナーがおり、展示ケースのデザインから制作・展示まで全ての作業を博物館内でこなしている。

博物館の活動：

- この 2 年間でウラルトゥ時代の考古遺物展示を 2 階から 3 階に移動し、新展示をオープンした。
- （2011 年秋）イタリアと協力しながら新展示室デザインを行っている。2011 年 2 月以降、合計 3 つの新しい展示室をオープンさせ、展示室の拡張を図っている。
- （2011 年秋）イタリアへ博物館コレクションを貸し出し、特別展を開催している。イヴェタ・ムクルチャン副館長がコレクション移送等に同行している。

保存修復室の施設・設備：

（文化遺産国際協力コンソーシアム相手国調査時には保存修復室内の視察が実現しなかったが、2011 年 4 月合意書準備ミッション以降に立入許可が出たため、調査が実現した。）

- 保存修復室は、博物館建物内部の一般客が入れないバックヤード 1 階の最も奥まった場所に位置しており、3 つの保存修復室が隣り合って設置されている。奥側居室から金属保存修復室（写真 19）、中央が染織品全般と絨毯修復室（写真 20）、手前側が金属および木材や陶磁器やガラスなど他素材修復を一手に担う保存修復室が並んでいる。
- 保存修復作業用の特別な設えはなく、一般的な居室を保存修復室として使用している。
  そのため、空調、ドラフト（粉塵・溶剤排気システム）、緊急用シャワー等の設備はない。また、手前側の保存修復室以外には、水道へのアクセスもない。
- 光源は、外に面した窓、天井蛍光灯、壁面に設置された蛍光灯、およびライト付き拡大鏡の光である。
- 科学分析機器としては、実体顕微鏡だけを所有している（写真 21）。
- 道具類は保存修復に必要と思われるものは一通り揃っている。
- 消耗品や特殊な材料をアルメニア国内で調達することは困難または不可能である。ヨーロッパなどへの海外渡航者があれば購入を依頼したり、代替品を使用して修復を行ったりしている。

19. 金属保存修復室の様子

20. 染織品保存修復室　専門家へのインタビューの様子

21. 考古遺物保存修復室の作業台

保存修復関連人材：

- 現在 5 名の保存修復専門家が在籍している。
- 奥側の金属保存修復室には、科学専門で金属（主に鉄）を対象とする科学者の女性 1 名が在籍しており、調査研究および保存修復処置も行っている。中央の染織品保存修復室には、染織品と絨毯の女性専門家がそれぞれ 1 名ずつ所属している。手前側の金属および考古遺物一般修復室には保存修復専門家女性 2 名が在籍している。そのうち 1 名が金属保存修復家のアトヤンツ女史であり、これら 3 つの保存修復室長を兼務している。
- 保存修復室長のアトヤンツ女史は、後述の歴史文化財科学研究センター (Scientific Research Center of the Historical and Cultural Heritage) にも兼務している。

保存修復家の人材育成：

- アルメニアには、保存修復専門家の人材育成を行う専門高等教育機関は存在しない。
- ソ連邦からの独立以前には、ソビエトやソ連邦諸国で保存修復の教育・研修を受ける機会があった。しかし、独立後にはその機会がない、または、殆どなくなった。
- 現在、文化財の保存修復を担っているアルメニア人専門家は、芸術大学出身者、伝統品の制作技術者、科学者が多い。保存修復の知識や技術は、主に経験の積み重ねに依るものである。
- 保存修復室長のアトヤンツ女史はロシアのモスクワやサンクトペテルブルグ、その他フランス、エジプトなどでの保存修復研修受講経験がある。
- アトヤンツ女史は、次世代を担う人材育成は重要課題と認識しているが、博物館や研究センターの保存修復室以外（大学など）で若い世代を教育する機会はない。

その他：

- 考古遺物の収蔵庫は、博物館建物内バックヤードに存在する（写真 22）。他に、染織品と木材の収蔵庫も存在する。収蔵庫ごとに管理者がおり、それぞれ収蔵管理を担っている。
- 考古遺物収蔵庫内では、紙製の収蔵専用箱に遺跡ごとにまとめて遺物を収蔵しており（写真 23 ～ 24）、大変几帳面に整理、台帳管理されている（写真 25）。
- もの・箱・棚の番号管理も徹底している。
- 博物館セキュリティーに関しては、職員の意識レベルが高い。各展示室には監視員が目を光らせており、バックヤードへの立ち入りは博物館職員の許可を必要とするセキュリティーロックのかかった扉を複数通過する必要がある。また各部屋の扉には鍵があり、わずかな時間でも退室する場合は鍵をかけ、鍵の管理を徹底している。

現在の問題点：

- 歴史博物館のコレクションは年々増え続けているにも関わらず、保存修復を担う専門家不足が深刻な問題であり、特に有機素材の考古遺物保存修復において顕著である。有機分野では、皮革と紙の保存修復はマテナダラン国立古文書館に専門家がいるが、連携はない。よって、歴史博物館では遺物を傷つけずに最低限のクリーニングする程度のことしかできない。
- 科学分析機器がないため、保存修復処置前に科学的な調査研究を行うことができない。将来的には、科学分析・調査を行ってから、修復作業を行うことで効率化を図り、さらに研究もしたいと考えている。

22. 金属遺物の収蔵庫

23. 収蔵箱

24. 収蔵箱内部

25. 保存修復のために修復室を出入りする収蔵品の記録

- 歴史博物館に一旦コレクションとして登録された遺物を、博物館外に出すことを禁止されている。しかし、よく設備された保存修復室はなく、特に科学分析機器が全くない。よって外の機関に協力してもらって、科学的調査することもできない。しかし、科学分析調査に興味があり、保存修復作業を効率化できるのではないかと思っている。
- 保存修復の専門書の殆どが英語で書かれているものが多く、英語を理解できない自分達には情報を得ることができない。

2-2-2. 国立美術館 (National Gallery of Armenia)

2011 年 2 月の調査時には、展示ガイドによる展示解説を受けながら 18 もの展示室を見学した。その後、保存修復室を視察しながら保存修復専門家へインタビューを行った。また、2011 年 10 月に国立美術館再訪問時に、JICA から供与された機材類を視察した。

面会者：
- 館長ファラオン・ミルゾヤン（Mr. Pharaon Mirzoyan）
- 保存修復室長

美術館の活動：
- 近年、コレクションに関する展示や保存修復室への JICA の一般文化無償資金協力（平成 21 年度）「アルメニア国立美術館美術品修復機材整備計画」が実施された。機材の到着は 2011 年 7 月を予定していたが、3 ～ 4 か月計画が遅れ、実際に到 着したのは 10 月であった。

展示：
- 展示されている絵画の状態はおおよそ良い。
- 展示室内の温室度管理はされていない。
- 窓にはカーテンがかかっているものの、大変薄く、隙間も多く、外から日光が展示室へふんだんに入ってきている。
- 壁掛け方式で展示されている。壁掛けは紐、ワイヤーを壁に取り付けられた配管に結び付けたり、金属の細長い断片に穴をあけて展示されたりしている。重量のある額縁に関してのみ、床と額縁下部に木材で支えがつけられている。
- ところによっては、額にガラスを入れて表面保護をしている。ガラスに光が反射して絵があまり見えない。

保存修復室の施設・設備：
- 保存修復室は美術館建物内部の一般客の入れないバックヤード 3 階にあり、素材ごとに 3 つの部屋に分かれている。木材および陶磁器保存修復室（写真 26）、絵画保存修復室（写真 27）、紙保存修復室がある。
- 保存修復作業専用の特別な設えではなく、一般的な居室を保存修復室として使用しており、文化財を保護するための空調設備や排気設備などはない。

アルメニア歴史博物館無機物保存修復ラボ　調査の様子

アルメニア国立美術館絵画保存修復室　調査の様子

- 木材および陶磁器保存修復室は比較的広く、10 畳ほどある。絵画の木製額や木製家具の保存修復作業場所が大半を占めている。同部屋の一角に設置されている机で陶磁器の保存修復作業を行っている。
- 中央が絵画保存修復室である。入口は一つであるが、中央の部屋から両隣に区切られた小部屋を持つ。中央部の 20 畳以上はあると思われる大部屋がメイン保存修復室となっており、ほとんどの道具類はここに集約されている（写真 28）。左奥も絵画保存修復室、右奥が紙に書かれた絵画の保管台・棚と事務机が置かれている。この絵画修復室に JICA から供与された様々な機械が設置されている（写真 29）。供与された機材は、修復に使用するサクションテーブルやホットスパチュラ、カメラと撮影周辺機材、顕微鏡などである。
- 手前の紙保存修復室は、10 畳ほどの広さをもつ。JICA 供与の修復用テーブルを中心に据え、周囲には材料の紙類が山積みで保管されている。
- ミュージアムクリーナーなどの保存修復専門機器も設置されている。
- 荷物用エレベーターは見受けられない。

保存修復関連人材：

- 現在、5 人が在籍している。
- 保存修復室長は絵画保存修復家である。他に、2 名の絵画保存修復家がいる。木材保存修復家の年配男性と陶磁器修復家の若手女性が在室だった。木材修復家は絵画の木製額や家具の修復を担当しており、陶磁器保存修復専門家は陶磁器の置物や像を修復している。

保存修復家の人材育成：

- 海外（ロシアやイタリア）から保存修復専門家を招聘、研修を開催し、職員の人材育成の機会を設けている。科学的分析も行っている。館長はアルメニア国内で専門的な保存修復室を有するのは国立美術館のみであると自負している。
- 木材修復家は、父親から木材の技術を学び、その後サンクトペテルブルグやレニングラードの修復工房で行われた上級者研修コースにて修復の技術を身につけた
- 他修復家らも、ロシア、イタリア、フランスによる上級者研修コースで研修を受けている。
- 美術品の保存修復においても、高等教育機関での教育により技術を身につけるのではなく、先達から知識や技術を伝授されながら実際の保存修復作業を通して技術を習得した。また、機会があれば、外国による人材育成研修を受けて技術力を高め、技術向上を図るのが通例である。

現在の問題点：

- 特に問題は挙げられなかった。

2-2-3. 歴史文化財科学研究センター（Scientific Research Center of the Historical and Cultural Heritage）

文化省からの紹介により訪問が実現した（写真 30）。2 月の訪問時にはセンター長が不在で、副長の 2 名にインタビューを行った後、修復室の見学を行った。4 月訪問時には、所長がおり、所長にインタビューを行った。

26. 木材・陶磁器保存修復室

27. 絵画保存修復室

28. 絵画保存修復室の作業台

29. 絵画保存修復室　JICA 供与機材

面会者：

- 所長ハコブ・シモニヤン（Mr. Hakob Simonyan）
- 副長コズュン・ガファダルヤン（Mr. Kozyun Ghafadaryan）
- 副長ホブハン・サナンニヤン（Mr. Hovhannes Sanannyan）

基礎情報：

- 主な活動は文化財の登録と文化財パスポート（登録書）の発行、法律的サポートである（写真 31）。モニタリングなども行っている。

保存修復室の施設・設備：

- 現在、組織の建物は 2 つある。今回訪問したエレバン中心街文化省向かいの建物の他に、郊外のラズダン川近辺にもう 1 つ建物がある（郊外の施設は訪問の機会を得ず）。
- センター施設は全体的に非常に古い。建物中央部分に吹き抜けがあり、吹き抜け上層部に面した廊下を取り巻くように部屋が配置されている。
- センター内の一室を保存修復室として使用している（写真 32）。ここで考古遺跡から発掘された様々な素材の考古遺物の保存修復作業が行われている。
- 保存修復作業専用の特別な設えではなく、一般的な居室を保存修復室として使用しており、文化財保護に適切な空調設備や排気設備などはない（写真 33）。
- 保存修復室内に保管されている考古遺物は、電気製品の空き箱や菓子箱に保管されている（写真 34）。サイズの小さな遺物に関しては、チャック付きビニール袋に入れてから、それらの箱に一時保管されている。
- 材料や道具は、バザールで購入したり、輸入したりすることもある。また、土器実測道具のように、手作りしたものもある（写真 35）。

保存修復関連人材：

- 所長、局長 2 名の他、50 名前後がセンターに所属している。しかし、保存修復専門家は 5 人のみである。本センターの保存修復処置は、アルメニア歴史博物館のイエレナ・アトヤンツが指導する立場にある。
- 保存修復専門家だけでなく、考古遺物の実測を行う専門家も所属している（写真 36）。

保存修復家の人材育成：

- 芸術アカデミー（彫刻）出身で、アトヤンツ女史から保存修復の専門知識と技術を学んだ。

現在の問題点：

- 染織品などの特殊遺物の保存修復処置に経験が無い。
- 保存修復室に排気設備がないため、発掘直後の遺物を保存修復作業中に、塵を吸うため掃除機を使用している。しかし、掃除機の排気口から塵が部屋中に拡散し、作業者に健康被害がないか心配している。
- 若手専門家の人材育成の機会がない。

30. 歴史文化財科学研究センター 内観

31. 文化財パスポート

32. 保存修復室

33. 保存修復室の作業台

34. 考古遺物の一時保管状況

35. 土器実測用の道具

36. 遺物実測の専門家

2-2-4. マテナダラン国立古文書館（Matenadaran Mashotots Institute-Museum of Ancient Manuscripts）

2011 年 2 月のコンソーシアム調査時には、保存修復部長に保存修復室を案内してもらい、説明を受けた。2011 年 11 月上旬再訪問時には、保存修復室が新施設に移転していたため、再度、保存修復部長に保存修復室を案内してもらった。

面会者：

- 保存修復部長ガヤネ・エリアツヤン（Ms. Gayane Eliazyan）（写真 37）

研究所・博物館の活動：

- 2002 年に JICA からの機材供与があり、効率よく仕事ができるようになった。2008 年に機材供与フォローアップ・プロジェクトとして人材育成研修を開催した。その期間が大変短かったため、更なる協力を希望している。
- 2012 年ユネスコの「2012 年世界本の首都（World Book Capital 2012）」に指定されており、マテナダランが中心的な役割を担う予定となっている。
  http://www.yerevan2012.org/institutions/matenadaran/
- 2011 年 9 月 20 日に、新棟をオープンした（写真 38 ～ 39）。新棟は、旧棟の後方に長く延びるように繋がる形で拡張されている。保存修復室、博物館展示、図書館など全ての施設は、旧棟から新棟に移動した。現在行っている旧棟の改装工事終了後には、旧棟を博物館展示として一般公開部分、新棟に保存修復室と図書室等を残して一般非公開部分の研究室棟とする予定である。改装工事終了は、2012 年 5 月を予定している。
- 2011 年末までにドイツ人ボランティア保存修復専門家が保存修復したマテナダラン古文書コレクションを出版予定（ドイツ語･アルメニア語併記）。調査研究･保存修復に関する内容も含めたかったが、資金が足りず、コレクションガイドとなる予定である。

保存修復室の施設：

- 旧保存修復施設は、博物館建物の一般客が入れないバックヤードに位置しており、3 つの保存修復室が隣接していた（写真 40 ～ 41）。一般的な素材ごとによる部屋分けはしていない。
- 全員が古文書に使用されている全ての素材、全ての段階の保存修復作業を行っている。ひとつの部屋は、「Japan」と命名された JICA からの供与機材を集めた修復室がある（写真 42）。マテナダランにある日本からの機材供与は、リーフキャスティング機、サクションテーブル、ラミネート機、製本裁断機、修復材料の様々な和紙や紙類などが大切に使用されている（写真 43 ～ 46）。
- 古文書には有害な虫や菌が付着している可能性があるため、燻蒸のための個室を設けている。保存修復処置を行う前には､燻蒸室内に設置された木製棚に古文書を一時保管し､24 時間燻蒸を行っていた。
- 新保存修復室は、新棟 3 階に位置している。旧保存修復室と比べ、非常に大きな保存修復室が廊下に面して複数設置されている。その保存修復室の廊下側に面した壁面はほぼ全面ガラス張りとなっている。
- 新棟には、遺物運搬用にも使用できる振動を最小限に抑えた特殊なエレベーターが設置されている。

37. マテナダランでの説明

38. マテナダラン正門（旧棟）

39. マテナダラン新棟

40. 古文書の修復 1（旧棟の保存修復室）

41. 古文書の修復 2（旧棟の保存修復室）

42. マテナダラン新保存修復室

保存修復関連人材：

- 各保存修復室で 4 名程の保存修復専門家が作業を行っている。
- 流れ作業ではなく、一人一人が一つのコレクションを最初から最後まで保存修復作業を行うことによって、責任を持たせるようにしている。
- ドイツ人男性がボランティアで保存修復作業を支援しており、マテナダランを技術的に定期的支援している。

保存修復家の人材育成：

- 人材育成については調査せず。

現在の問題点：

- 紙も皮革も独自に保存修復をできるが、古文書に使用されている金属のオーナメントを保存修復できる専門家がいないため、大変困っている。
- JICA から供与された機材が 2 年以上故障したままだが、どこに相談をしていいか判らず困っている。

2-2-5. アルメニアの保存修復分野に対する考察

アルメニア共和国内には、現在、文化財保護のための保存修復関連機関・施設がいくつか存在する。しかし、その数は比較的少なく、各機関・施設の規模も小さい。また、旧ソ連邦時代には、文化財の保存修復センターがアルメニア国内にいくつも存在していた。しかし、1991 年ソ連邦崩壊・アルメニア独立後、近年は中央集権化と研究機関の再統合化を進めるアルメニア政府の方針に従い、文化財の保存修復機関・施設を首都エレバンに集中させたり、研究機関の再統合を図ったりする動きが活発化している。必然的に、保存修復専門家が首都エレバンに集中してしまい、地方の保存修復分野の過疎化が加速している。

アルメニアの保存修復分野における問題は、第一に人材不足（特に若手）、第二に保存修復専門の人材育成機関・教育システムの不在、第三に経済的問題の 3 点に大別できる。

まず、博物館・美術館やその他の保存修復機関・施設で働くアルメニア人の保存修復専門家の数は、大変少ない。その中でも特に若い世代の保存修復専門家が極めて少ないことは深刻である。その理由として、第二の問題点が挙げられる。保存修復の専門的な人材育成機関・システムの不在である。現在は、文化・歴史・美術・博物館学出身者のなかで興味をもった若手を保存修復専門家として経験を積ませながら現場で育てている。しかし、現場での経験は大変限られたものであり、知識と技術の広がりに限界がある。第三の問題点として、経済的問題が挙げられる。保存修復専門家の所属する国立博物館・美術館・研究所の運営費は政府からの限られた資金により賄われている。保存修復に割ける費用も当然限られる。また、保存修復専門家の賃金は大変低く、1 か月 120 ドル程度である。そのため、保存修復専門家になりたいと思う人も少ない。それがまた人材不足を生むというように、問題の悪循環がある。

その他の問題としては、保存修復の情報へのアクセスの困難さや保存修復専門家間のネットワークの不在が挙げられる。アルメニア語で書かれた保存修復関連の書物が教会建築・彫刻以外は皆無なため、最新情報を知る手立てが無い。また、エレバン市内においても他機関の保存修復専門家同士の繋がりがあまりないため、修復に関する相談や議論をかわす場面が得られない。

よって、アルメニア側から日本へ強く要請されている案件として、保存修復専門家の人材育成、最新の技術や知識の情報交流、専門家間のネットワークの構築などを目的としたワークショップ等の開催がある。

43. JICA 供与機材 1

44. JICA 供与機材 2

45. JICA 供与機材 3

46. JICA 供与機材 4

今、アルメニア人保存修復専門家に必要なのは、情報へのアクセスと様々な事例を知ることだと思われる。彼らの長年の経験を整理し、世界的な水準に引き上げる知識・情報の体系化が必要であろう。

２－３. アルメニア共和国における考古学調査の状況

アルメニア内には、無数の考古遺産が存在している。初期人類の足跡を示す旧石器時代の遺跡から始まり、青銅器時代、ウラルトゥ時代、ローマ・ヘレニズム、中世などに属するさまざまな時代の遺跡が存在している。残念ながら、資金面・調査体制の問題があり、今日の世界的なレベルで調査が十分に行われているとはいえない状況にある。今回の調査では、科学アカデミー考古民族研究所を訪れ、所長のパヴェル・アヴェティスヤン（Pavel Avetisyan）にインタビューを行った。

2-3-1. 調査主体

考古学調査を実施する機関としては、考古民族研究所（Institute of Archaeology and Ethnography, National Academy of Sciences of Armenia）、エレバン国立大学（Yerevan State University）などの各大学の考古学科、歴史文化遺産科学研究センター（Scientific Research Center for the Historical and Cultural Heritage, Ministry of Culture and Youth Affairs）などがある。これらに加えて、調査件数は少ないながら、地方の博物館などもあげられる。外国人による考古学調査は、これらのアルメニア国内の組織との共同調査という形でのみ認められている。

2-3-2. 調査許可の申請と主体者の義務

まず、考古学調査を行う主体は、調査申請書を作成しなければならない。この申請者は文化省内の考古学調査審議会において審査され、申請が受理された場合は、発掘許可がおりる。各シーズンの発掘調査終了後には調査報告書の提出が義務付けられている。また、発掘で出土した遺物の中で重要とされるものについては、発掘終了後２年半以内に国立歴史博物館に収蔵することになっている。

2-3-3. 遺跡の登録

調査主体者が提出した報告書をもとに、歴史文化遺産科学研究センターで文化財パスポートが作成され、遺跡の情報が記録される（写真 47）。

2-3-4. 考古学における人材育成

エレバン国立大学など、歴史学部が設置されているところでは考古学を専門に学ぶことができる。例えば、エレバン国立大学では考古学の修士までは取得可能である。博士の審査に関しては、考古民族研究所が審査委員会を組織することになっており、博士論文作成者は同研究所の研究員を論文指導員の一人に迎えなければならない。

2-3-5. 問題点

考古科学の分析を行う施設の不足がある。旧ソ連時代には、ロシアの考古学の研究施設で分析を行うことができた。しかし、1991 年の独立以降、そうしたロシア内の研究施設を使用することが難しくなり、現在では、アメリカ、フランスの研究所に分析を依頼している。

さらに、考古遺物の保存修復処置処行う保存修復センターの設立とセンター付属の保存修復家の確保も長らく希望されている。現在、考古民族研究所が調査した遺跡から出土した遺物の保存修復は、アルメニア歴史博物館のイェレナ・アトヤンツが個人的に依頼を受けて、保存修復を行っている。しかし、保存修復処置を行うべき遺物数の増加、処置室の不足、人材不足などから、多くの金属遺物が保存修復処置を待つ状態にある。

また、研究所から配分される調査費が非常に少ないという問題もある。開発に伴う緊急発掘以外では、国費・民間資金あわせて、発掘調査の資金は皆無に等しい。よって、学術調査を行うには、資金を持つ外国隊と共同で実施することが普通となっている。

また、考古民族研究所に限った話ではないが、国立の研究機関の研究員の給与が低いために（およそ月 100 ドル）、研究員は何らかの副業を行っていることが多く、調査・研究を行える経済的環境は悪い。

３. 日本による協力可能性のある分野

隣国との複雑な歴史的関係をもつアルメニアでは、歴史や文化というものが、アルメニア民族のアイデンティティを維持する装置であるという認識から、国民の歴史・文化に対する興味や政府の取り組みは活発な国であるといえる。しかし、旧ソ連邦の国家の多くが直面している、資金不足、従来の教育システムの崩壊による次世代の人材育成が困難といった難問が、ここアルメニアにも濃厚にみられる。

こうした状況下で、今回、文化財保護に関連する機関の担当者との面談を通して、日本が今後協力できる分野として考えられるのは以下のとおりである。

３－１. シンポジウムやワークショップの開催

上記の通り、旧ソ連邦の国々に共通した課題として、次世代を担う専門家の育成が困難である点が挙げられる。ソ連邦時代には、ロシアが専門家の育成を行う中心地として機能していた。ロシアでの中長期の研修やソ連邦各国へのロシア人専門家の派遣などを通じて、各国の専門家の育成が図られていた。しかし、ソ連邦崩壊後は、そうしたロシア中心の人材育成システムが崩壊したために、独立した各国とに自前で人材の育成を行わなくてはならなくなった。

一方、指導者の不足という問題も存在する。かつてロシアで学んだ世代が、独立後 20 年経ち、引退したり、または最新の技術レベルとは大きな乖離があったりと、指導者が不足しているという現状がある。

解決策として、長期的な支援になるが、１～２名の専門家の研修を、数ヶ月間かけて日本国内で実施するという案がある。ただし、これについては、指導員の準備、カリキュラムの整備といった面で、日本国内の研修の受け入れ側に大きな負担がかかるであろう。他には、短期ではあるが、人材育成を目的としたセミナーやワークショップの開催が考えられる。日本政府の海外での文化財保護を支援する枠組みや、民間企業の助成金を利用したプログラムの実施が考えられる。こうしたセミナーやワークショップの開催は、研究者間の技術交流や意見交換を促進することが期待され、アルメニア人の人材育成に寄与することができると考えられる。

３－２. 大学との連携協力

文化財保護の分野では、学問によってカリキュラムの充実には偏りがある。考古学・歴史学は比較的充実した教育体制があるといえ、エレバン国立大学など複数の大学で専攻することが可能である。一方、保存修復においては、大学や研究機関など高等教育機関で学ぶことはほとんど不可能である。今回の、保存修復専門家に対して行った数々の聞き取り調査でも明らかになったように、アルメニアで保存修復家になるには、実地で経験を積む以外には機会がないようである。この場合、最新の保存修復の理念や方法を体系的に学ぶ機会がないことや、経験を積むのに時間がかかるといった弊害がある。そこで、保存修復や文化財保護に関連するカリキュラムの向上を目指して、助言や意見交換をエレバン国立大学やアルメニア国立教育大学（Armenian State Pedagogical University）などの関連学科（考古学、美術、建築など）と協力して行うこと

が可能であると考えられる。大学における教育を充実させることが、長い目でみて、文化財保護の分野における人材の育成に繋がると期待される。

３－３. 機材供与による支援

マテナダラン古文書館に対しては、2001年にJICAを通じて紙の保存修復に関する機材供与が行われた（平成13年度・草の根文化無償資金協力「マテナダラン古文書館に対する古文書保存機材フォローアップ計画」）。今回、マテナダランでの聞き取り調査では、この機材供与の継続または支援の要請が出された。特に、紙の保存修復に必要な和紙の調達に対して支援が要請された。現在のところマテナダランでは、修復に不可欠な日本の和紙はイタリア経由で入手しているとのことである。また、日本から供与された機材のいくつかは、故障し使われなくなっており、修理や調整が必要な状態となっている。こうした状況を鑑み、マテナダランに対しては、何らかの形で機材供与後のフォローアップが必要と思われる。

他方、JICAは2011年に国立美術館収蔵の芸術作品の修復を目的とした無償資金協力「アルメニア国立美術館美術品修復機材整備計画」を実施し、国立美術館に対して機材供与を行った。どのような経緯で機材供与が行われるに至ったかは不明であるが、機材が実際に美術館側に供与される際に、日本側に機材の調整・説明をする関係者がいなかったと聞いている。機材供与における細かなサポートが欠けていると言わざるを得ない。

将来、アルメニアの文化財保護の事業を実施する際には、充実した資金を持つ日本のODA事業との連携・協力を視野に入れる必要があるのは間違いない。しかし機材供与は、相手国のニーズや人材・技術レベルに合わせて実施されることが望ましいということも忘れてはならない。また、供与後のサポートを行うことも必要である。いわば日本製の自動車を海外で販売する際に行うような手順が必要であり、機材供与をこうした考えなしに行った場合、単に不要な資材を外国に置くだけの事業と化す恐れがある。機材供与を成功裏に実施するには、現地で研究・調査活動を行っている日本の研究機関・大学とJICAなどの政府機関とが日ごろから密なるコミュニケーションをとる必要がある。

4. おわりに

長い歴史をもつアルメニアの文化遺産の多くは、アルメニア人のアイデンティティの象徴でもある。そのため文化遺産の保護は、国の重要な政策として位置づけられ、活発な活動が展開されている。しかしソ連崩壊後の急激なシステムの崩壊とともにその活動は困難を迎えるようになった。そうした中で今回、アルメニアにおける文化遺産の保護状況と国際協力の現状を把握し、日本による協力の可能性を調べるために、首都のエレバンにて関係機関への聞き取りや視察等の調査を行った。

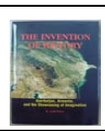
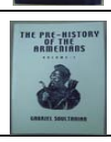
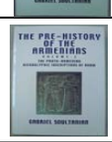
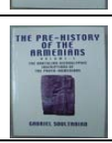
現在、アルメニアが文化遺産の保護に非常に積極的であることは、今回の調査において関係諸機関が大変協力的であったことからも窺えた。文化遺産を守るために必要な組織や保護制度も準備されており、そうした中で国際協力として諸外国に何を求めているのかも明確に示されていた。

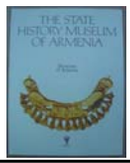
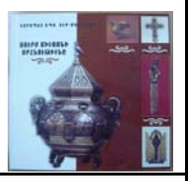
深刻な問題として、旧ソ連時代の人材育成システムの崩壊により、保存修復や文化財保護に携わる人材が不足していることは博物館や美術館などの各所で見られた。この国が必要とする人材の育成については、ワークショップの開催や大学への支援・助言などを通じて、日本が持つ技術と人材で協力できる可能性は大きいと言える。また今回の調査で、これまで我が国が供与した数々の機材も大切に活用されている一方で、機材のいくつかについては修理が必要な状況にあるということも明らかになった。機材供与を行った国として、支援活動後のフォローアップも責任を持って行う必要があるであろう。

人材育成や機材供与などは、受け入れ側が協力の成果を活用する意欲と制度を持つことで協力がより有効なものとなるが、アルメニアではこうした意欲や制度が整っていることも今後の協力を検討する上で重要な要素と言えるであろう。

複雑な歴史と情勢を抱えるコーカサス地域ではあるが、今後我が国がアルメニアを含めたコーカサス諸国で文化遺産への国際協力を行うことで、文化遺産保護を通じてこの地域の安定に貢献できる機会になれば幸いである。

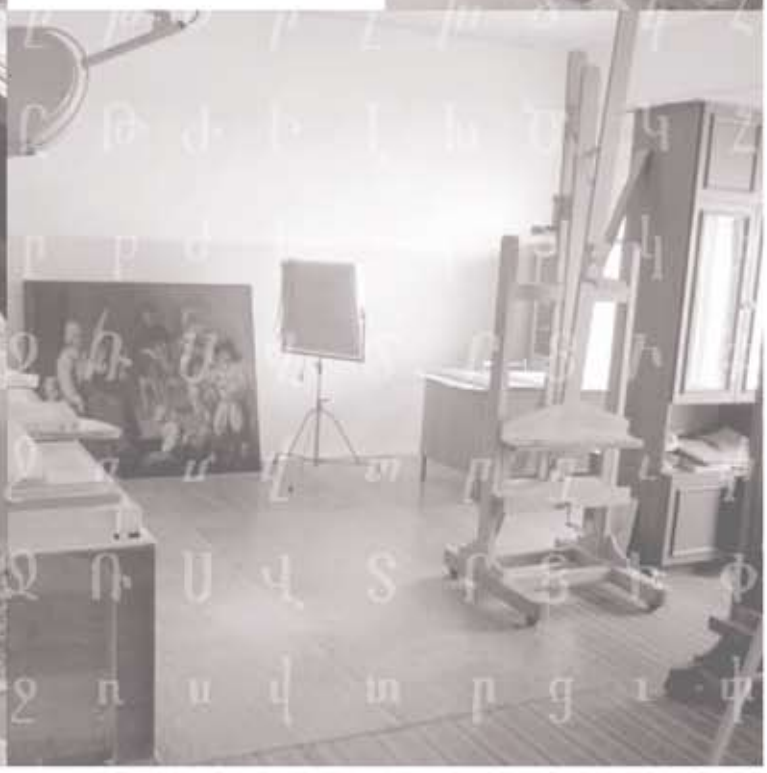
5. 現地入手資料一覧

ID	タイトル	著者	出版者	出版年	外観
地図					
	The Roads of Armenia	G. Beglaryan	Yerevan: Collage LLC.	2010	
	Yerevan	G. Beglaryan	Yerevan: Collage LLC.	2010	
	Armenia and Mountainous Karabakh	G. Beglaryan	Yerevan: Collage LLC.	2010	
書籍					
	Southern Caucasus	G. Beglaryan	Yerevan: Collage LLC.	2010	
	Vital Agreements for Armenia	H. Azatyan	Yerevan: National Academy of Science of the Republic of Armenia, Institute of History	2004	
	St. Etchmiadzin				
	Culture of the Armenian Khachkar (Cross-Stone)	G. Mkrtchyan (ed.)	Yerevan: Nushikyan Printing House	2010	
	The Invention of History: Azerbaijan, Armenia, and the Showcasinf of Imagination	R. Galichian	London: Gomidas Institute; Yerevan: Printinfo Art Books	2009	
	The Pre-History of the Armenians, Volume 1	G. Soultanian	London: Bennett and Bloom	2003	
	The Pre-History of the Armenians, Volume 2: The Proto-Armenian Hieroglyphic Inscriptions of Aram	G. Soultanian	London: Bennett and Bloom	2004	
	The Pre-History of the Armenians: Volume 3: The Anatolian Hieoglyphic Inscriptions of the Proto-Armenians	G. Soultanian	London: Bennett and Bloom	2009	
	Atlas of Communication Routes of Armenia and Artsakh	R. Hovhannisyan	Yerevan: "EKRAN" JSC of the Ministry of Education and Science of RA	2001	
	Pharaon Mirzoyan	K. Mikaelian	Yerevan: Noyan Tapan Publishing House	2008	

	A Glance from the Bronze Age: Findings from the Bronze Age Bruial Mounds in Armenia IV-I Millennia B. C.: From the Collections of the History Museum of Armenia	History Museum of Armenia	History Museum of Armenia	2010	
	The State History Museum of Armenia	Museums of Armenia	Watertown: Armenian Library and Museum of Armenia		
				2006	
				2008	
パンフレット					
	artexpo 2011 アートエキスポ案内資料（CD付き）	Ministry of Culture of RA	Ministry of Culture of RA	2011	
	Culture 09 文化省紹介冊子	Ministry of Culture of RA	Ministry of Culture of RA		

Armenia

文化遺産国際協力コンソーシアム
平成 22 年度協力相手国調査
アルメニア共和国調査報告書

発行日：平成 24 年 3 月
発　行：文化遺産国際協力コンソーシアム
〒 110-8713 東京都台東区上野公園 13-43
Tel. 03-3823-4841

JCIC-Heritage